彫科と塑造科に分かれたが、同三十四年にこの分科が廃止され、生徒は実習授業において一様に塑造と実材製作（第一年より第四年まで木彫、牙彫、石彫、鋳造のうちの一科目を選択し専修する。）を学ぶこととなった。それが今回再び改正され、生徒は第一年から卒業期に至るまで上記三部のいずれかを選んで専修（塑造部生徒は塑造のみを、木彫部生徒は木彫と塑造を、牙彫部生徒は牙彫と塑造を学ぶ。）することとなり、石彫、鋳造の科目は廃止された。改正後の実習カリキュラムを次に記す。

課目		毎週教授時数				
		第一年	第二年	第三年	第四年	卒業期
塑造実習		二七	二七	二七	三三	卒業製作
木彫及び塑造実習	木彫	一九	一九	一九	二三	
	塑造	八	八	八	一〇	
牙彫及塑造実習	牙彫	一九	一九	一九	二三	
	塑造	八	八	八	一〇	

⑦ 制服規定改正

制服規程改正に関する次の文書が現存する。

庶第二三號

本校生徒ノ現在服制ハ明治三十一年八月十五日及同三十三年七月廿四日付御認可ヲ得テ定メタルモノニ候處今般右御認可ニ基キ別紙ノ通生徒服制及着装規程相定候間此段及報告候也

明治四十年二月廿二日　　東京美術學校長　正木直彦

文部大臣　牧野伸顕殿

〔別紙（印刷物）〕

東京美術學校生徒服制及着装規程　明治四十年二月制定

第一條　生徒ノ服制左ノ如シ

制帽		略帽		制服		
地質	黒絨	地質	麥藁	地質	紺「ヘル」	冬地質 紺「ヘル」
徽章	金色美字（如圖）	徽章	制帽ニ同シ（正面ニ附ス）	釦式	金色徑六分（如圖）	衣制式 如圖（寛濶）
眼庇	黒革（裏白）	帶布	如圖（深緑色）	衣制式	立襟脊廣形（如圖）	袴制式
頤紐	黒革（釦、金色徑三分如圖）	制式	普通形（如圖）			
制式	佛蘭西形（如圖）					

服	夏衣	釦 地質	藍鼠色「セル」又ハ小倉
		釦 制式	冬衣ニ同シ 冬衣ニ同シ
	夏袴	地質	夏衣ニ同シ
		制式	冬袴ニ同シ
外套	袖 地質		黒絨又ハ之ニ準スヘキモノ
	釦		制服ノ袖釦ニ同シ
	制式		普通「ヲーフルコート」形（如圖）
日覆	地質		白布
	制式		普通形
靴	地質		黒革又ハ黒「ズツク」（儀式及本校ヨリ命シタル場合ノ外革色隨意）
	制式		短靴
脚袢	地質		紺絨又ハ黒麻織
	制式		如圖

第二條　制服ヲ着用スベキ場合左ノ如シ

一、本校ニ出入スルトキ

二、特ニ本校ヨリ指定シタルトキ

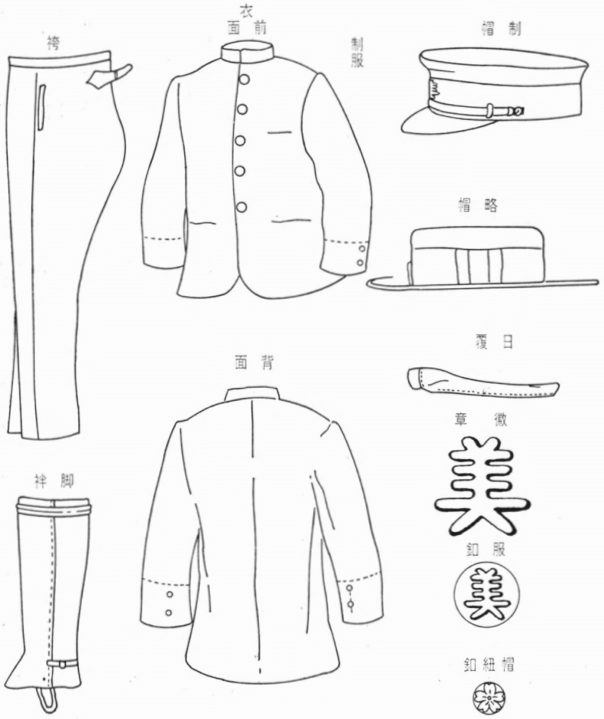
第三條　六月一日ヨリ九月三十日迄ノ間ハ夏衣袴ヲ着用シ制帽ニ日覆ヲ附スヘシ但此期間ニ限リ第一條所定ノ暑帽ヲ代用スルコトヲ得ルト雖儀式其他必要ノ場合ハ制帽ヲ着用セシムベシ

第四條　靴ハ本校出入ノトキ必ズ之ヲ穿ツヘシ但雨雪天又ハ泥濘ノ時ハ長靴ヲ代用スルモ妨ゲナシ

第五條　脚袢ハ前條但書ノ場合及旅行其他本校ヨリ特ニ命スルトキ附着スベシ

第六條　疾病其他不得已事故ニ依リ制服等ヲ着用スルコト能ハザルトキハ本校生徒心得ノ手續ヲ爲スベシ

第七條　新ニ入學ヲ許サレタル生徒ハ本校規則所定ノ日限内ニ本規程ノ服裝ヲ整フベシ



（「自明治四十四年一月至　年　月教務内規、諸規定書類　教務掛」）

⑧　校友会文学部再興

明治四十年三月、校友会文学部が再興され、大村西崖が部長となった。文学部が新設されたと報じている新聞もあるが、新設されたのは明治三十五年六月、新校長正木直彦を会長に迎えて校友会が体制を改めたときで、このとき

本部ハ文學美術ニ關スル識見ヲ高尚ニスルヲ目的トシ詩歌文章等ヲ研究シ又ハ朝野ノ名士ヲ延キテ諸般ノ講話ヲ請フモノトス

という規則の制定もあった。しかし、概して活動が不活発であったので、有志がこれを再興したのである。この文学部の活動は明治末の美術界、文学界の情況との対応において興味深いものがあるので、ここに概況を記すが、その前にまず文学部再興以前における生徒の文学活動について触れておきたい。

校友会は本校生徒、教員、卒業生によって構成されていたが、明治三十五年六月の改革以前においてはその活動に展覧会（会員の新作展）、講話会（名士の講演）、運動会（遠足）があった。会員の中には少なからず文学趣味を有する者があり、例えば屋代鈗三（晁江）、水谷鉄也（佳園）、白井保次郎（雨山）その他は短歌の会を作り、小杉榲邨を選者に仰いで毎月歌会を開き、佳作を『校友会雑誌』に寄稿した。当時は香取秀真、原安民、平子鐸嶺、高村光太郎のような詩歌に長けた会員もいた。秀真、安民、鐸嶺の三人は正岡子規門下、根岸短歌会（明治三十年結成）の会員で、同会の機関誌『馬酔木』発行（同三十六年）の際に秀真と鐸嶺は編集員となっている。とりわけ秀真は短歌に造詣が深く、本校在学中から研究サークルを作って『闘芳』（同二十六年）、『うた』（同二十九年）などを発行する一方、校内の花月会（黒川真頼を選者として同二十六年結成）にも加わり、卒業後は佐々木信綱編『やまと錦』や『心の花』（同三十二年発刊）に寄稿するとともに根岸短歌会に加わった。『校友会雑誌』にもよく寄稿している。安民も晩年に大磯鴫立庵主となったことからもわかるとおりの歌よみであった。鐸嶺は『校友会雑誌』の編集を一手に引き受け、自らもこれに研究論文を発表しているが、筆名で短歌も載せていることも考えられる。高村光太郎は彼らよりやや後輩で、在学中の明治三十三年に与謝野鉄幹の新詩社に入り、篁砕雨の筆名で